

成田市松崎遠原遺跡

—千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書—

平成 8 年 1 月

千葉県教育委員会

財団法人 千葉県文化財センター

なり た まん さき とう ばら
成田市松崎遠原遺跡

—千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第282集として、千葉県立成田園芸高等学校情報科学棟建設に伴って実施した成田市松崎遠原遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、埴輪が出土したほか、奈良時代の竪穴住居跡や溝状道路跡が検出されるなど、この地域の古墳時代や奈良時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年1月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県教育庁管理部施設課による千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県成田市松崎字遠原3-31ほかに所在する松崎遠原遺跡(遺跡コード211-060)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長西山太郎、成田調査事務所長石田廣美の指導のもと、主任技師井上哲朗が下記の期間に実施した。

発掘調査 平成7年6月1日～6月30日

整理作業 平成7年7月1日～7月31日

- 5 本書の執筆は、主任技師井上哲朗が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、同管理部施設課、千葉県立成田園芸高等学校の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「成田」(N1-54-19-10-3)
 - 第2図 成田市役所発行 1/2,500都市計画図「成田市 24」
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成2年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標化である。
- 10 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

	カマド袖部(砂質粘土)	▪	上飾器
	カマド火床部	▪	須恵器
	硬化面	◦	土製品、石製品
	擾乱	▪	金属製品

本文目次

I はじめに.....	1
II 検出遺構.....	3
III 出土遺物.....	8
IV まとめ.....	11
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡.....	1	第6図 S D01、S K02・03、P 01～P 08.....	6
第2図 遺跡周辺の地形.....	2	第7図 S D01遺物出土状況.....	7
第3図 調査区全体図.....	3	第8図 古墳時代以前の遺物.....	8
第4図 S K01、S I 01、S I 02.....	4	第9図 奈良時代以降の遺物.....	9
第5図 S I 03.....	5		

表目次

第1表 成田安食線関連遺跡概要.....	2	第2表 奈良時代土器観察表.....	10
----------------------	---	--------------------	----

図版目次

図版1 (1)航空写真 (2)B区全景	図版4 S I 03 (1)全景 (2)遺物出土状況
図版2 (1)A区トレンチ (2)S K01 (3)S I 01全景	(3)カマド半截状況 (4)カマド掘方
図版3 S I 02 (1)全景 (2)遺物出土状況 (3)カマド半截状況 (4)カマド掘方	図版5 (1)S D01全景 (2)S K02・03、P 01～P 04 (3)S D01、S K04、P 06～P 08
	図版6 出土遺物

I はじめに

1. 調査の経緯

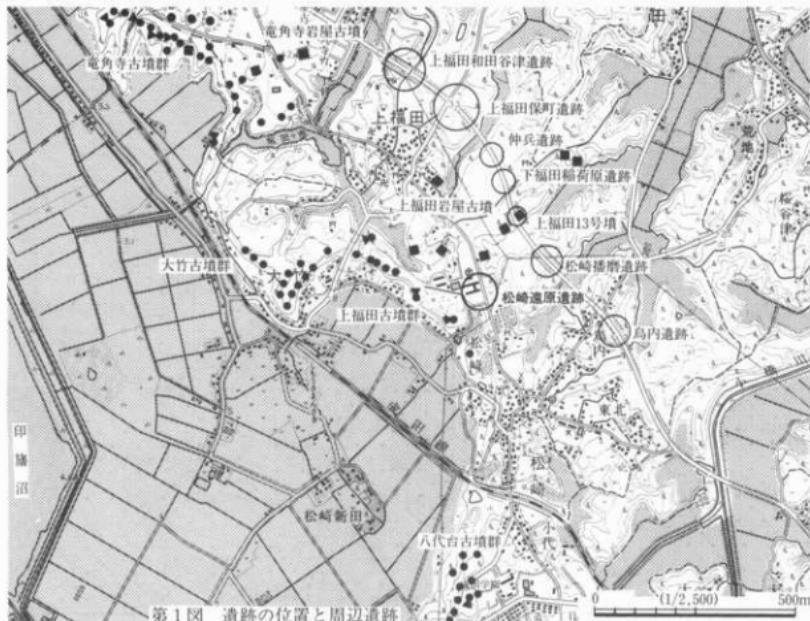
千葉県立成田園芸高等学校では、平成8年度に情報科学科の設置が予定され、それに伴い千葉県教育庁管理部施設課によって敷地内に新校舎（情報科学科棟）の建設が計画された。建設予定地が周知の遺跡内にあることから、千葉県教育委員会は記録保存の措置をとることとし、平成7年6月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。

2. 遺跡の位置と環境

松崎遠原遺跡は成田市北西部、印旛郡栄町との境界近くに位置する標高30mほどの台地上に立地する。西側には印旛沼及び沖積地が広がり、北側から東側は利根川へ流入する根木名川及びその支流が形成した樹枝状の谷津が入り込む。

本遺跡の約300m東側を通る県道成田安食線の建設に際して、昭和61年度から平成2年度にかけて数か所の遺跡の発掘調査が実施された。以下、この成果を中心に、本遺跡で検出された縄文時代、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世について当地域の歴史的環境を概略することとしたい。

縄文時代の遺物は全遺跡から出土している。草創期は上福田和田谷津遺跡、早期は松崎播磨遺跡、後期は下福田稻荷原遺跡、松崎播磨遺跡の加曾利B式が顕著である。竪穴住居跡は下福田稻荷原遺跡で5軒、鳥内遺跡で8軒が検出されている。



第1図 遺跡の位置と周辺道路

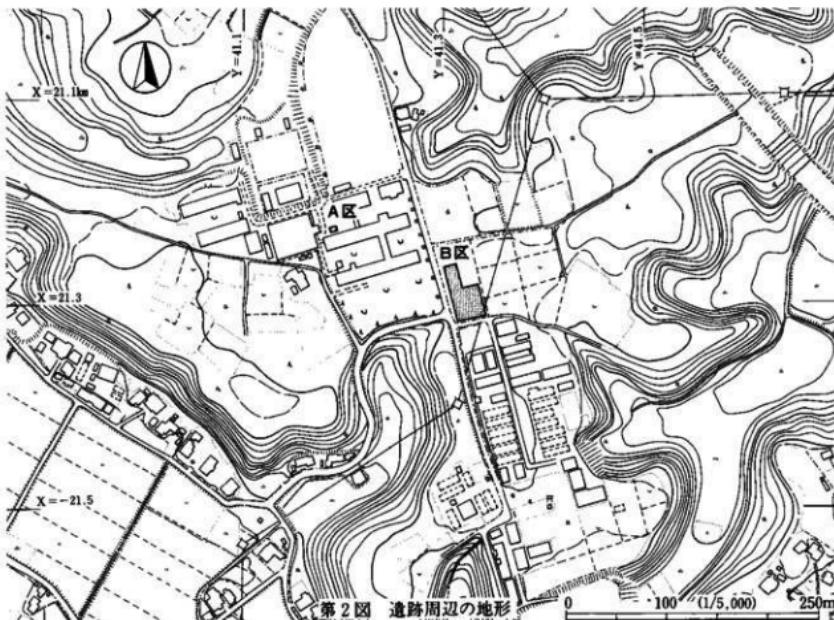
古墳時代後期には印旛沼を望む台地縁辺部に多数の古墳が築造された。本遺跡の北西約2kmには県内最大規模の龍角寺古墳群、西側約1kmには大竹古墳群、西側に隣接して上福田古墳群などが存在する。また、北西約3kmには7世紀後半の創建と推定される龍角寺が、北西約2.5km地点には埴生郡衙推定地がある。古代松崎地域は印旛郡玉作郷の一部に比定され、7世紀から8世紀にかけては畿内勢力と密接に関係したと考えられている。成田安食線関連遺跡では、上福田和田谷津遺跡、仲兵遺跡、松崎播磨遺跡、鳥内遺跡で8世紀の堅穴住居跡が検出されている。

中世には埴生庄松崎郷、福田郷地域と考えられ、各遺跡で溝や土坑群が検出されている。松崎播磨遺跡の台地整形区画及び内部の土坑群は、中世集落が近在したことを探測させるものである。

遺跡	绳文時代				古墳時代後期～平安時代	中世
	草創期	早期	前期	中期		
上福田和田谷津遺跡	○			△	○ 堅穴住居跡2(7C前、7C後～8C初) 掘立柱建物跡2	溝
上福田保町遺跡		△	△		○ 堅穴住居跡1(7C前～中) ○ 堅穴住居跡1(8C代)	溝・土坑群・ピット群
仲兵遺跡		○	△	○	○ 祭祀遺構1	
下福田稻荷原遺跡	△	△	△	△	○ 方墳1(7C後)	溝・土坑群
上福田13号墳	△		○	△	○ 堅穴住居跡16(7C中～9C初)	
松崎播磨遺跡	○	○	△		○ 堅穴住居跡27(7C～9C末)	溝・台地整形区画・地下式坑
鳥内遺跡						

第1表 成田安食線関連遺跡概要(△：繩文土器1～9点、○：10～19点、◎：20点以上)

(財團法人千葉県文化財センター「主要地方道成田安食線地方道改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書II」1993年 から作成)



II 検出遺構

本遺跡の調査は、校舎側のA区(45m²)と道路を挟んだ農場内のB区(999m²)部分に分かれる。

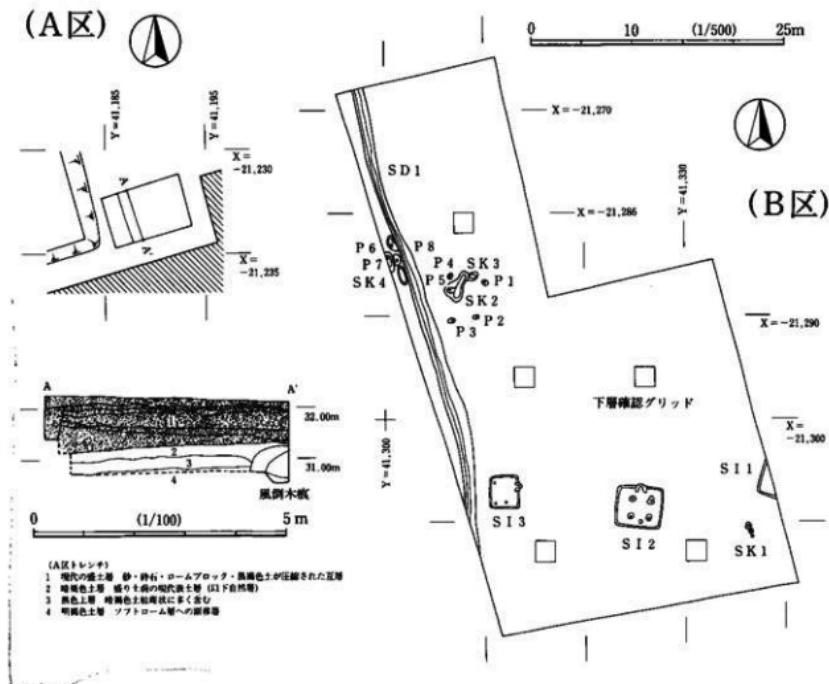
遺構はB区のみで検出された。トレンチャーによる擾乱が激しいが、縄文時代炉跡1基、奈良時代竪穴住居跡3軒、奈良時代溝状道路跡1条、中世柱穴跡8基、中世土坑4基が確認された。このうち、縄文時代炉跡については明確な時期は確定できない。竪穴住居跡及び溝状道路跡については、覆土内遺物から8世紀初頭と判断した。また、中世遺構については、その形状から柱穴跡と土坑に区分し、形状及び出土遺物から中世(15世紀代)と判断した。

なお、調査時に付けた遺構番号は、本書では一部以下の様に変更した。

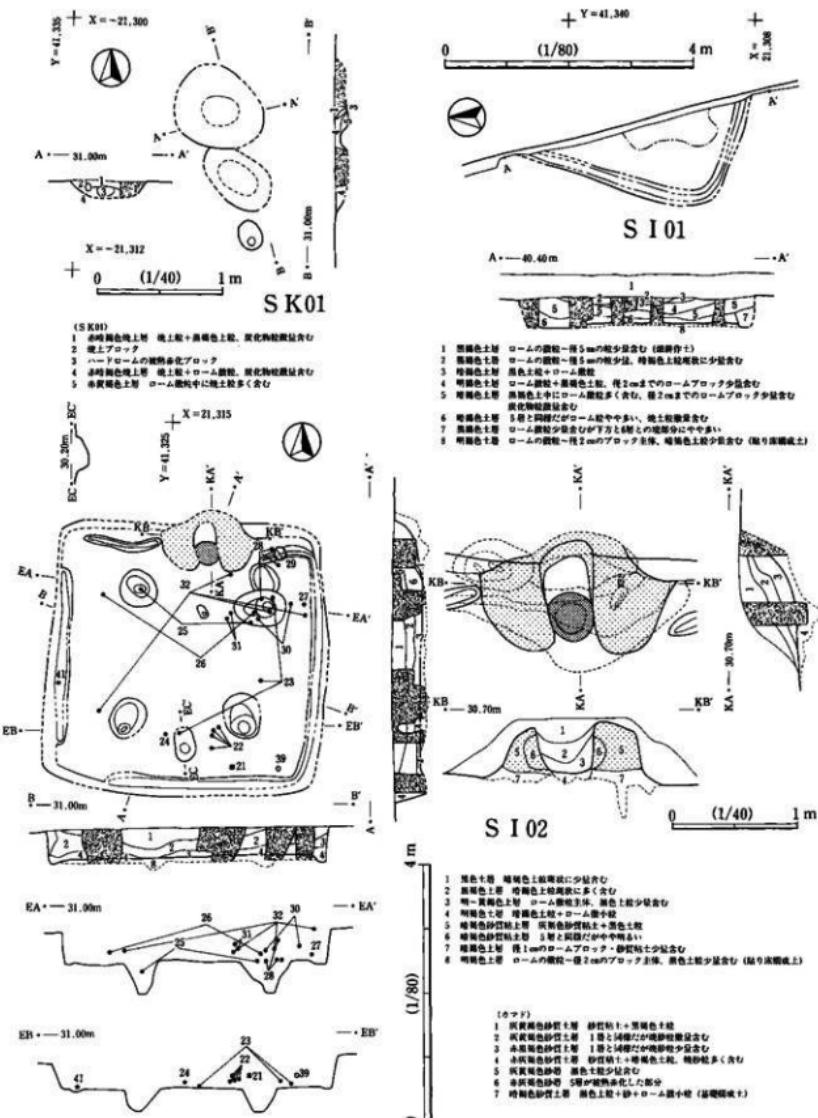
S K02→S K02・03・P05、S K03→S K04、S K04→P07・08、S K05→P06

A区(第3図、図版2)

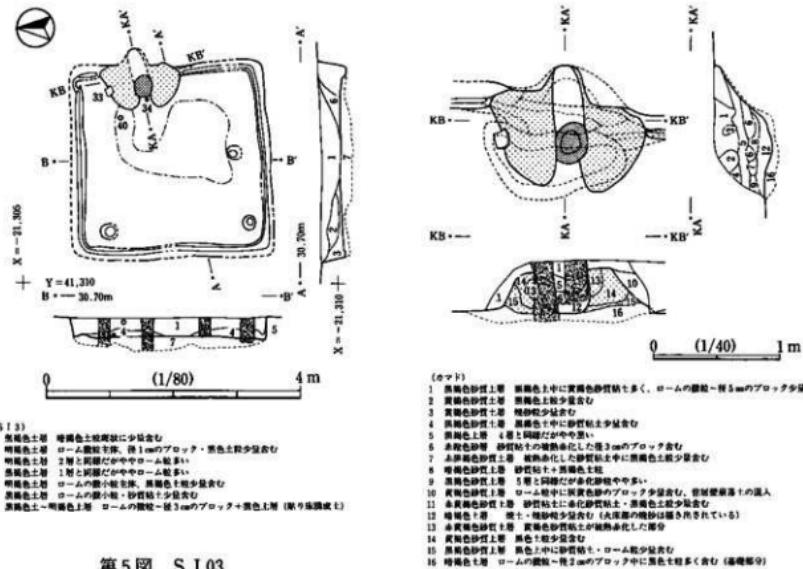
まず、調査範囲45m²の中には南北に長いトレンチ(1m×5m)を設定し、土層を確認した後、残りの部分を掘り下げた。地表から1mほどまでは砂、碎石、ロームブロック、黒褐色土などが堅く圧縮された層が重なっており、明らかに近年の盛土であることが確認された。それより下は盛土以前の現代表土層、



第3図 調査区全体図



第4図 SK01, SI01, SI02



第5図 S I 03

腐植土である黒色土層、ソフトローム層への漸移層と考えられる明褐色土層が存在し、南端部では風倒木痕が確認された。近年の盛土層中から埴輪片が多数検出されたが、それより下層からは全く出土せず、遺構の落込みも検出されなかった。現在の県立成田園芸高校校舎敷地部分にはかつて古墳群が存在していたが、第二次大戦直後に重機によって整地され、その際に石棺や多くの埴輪が出土したという話が伝わっており、この部分の盛土はその際のものであることが推測される。

なお、盛土以前の表土の標高は31m余であるが、これは東側の体育館の敷地、北側の校庭、さらに道路を挟んだ農園地区（B区を含む）の標高とほぼ一致していることから、校舎の建つ部分はほぼ全体に盛土部分であり、古墳のマウンドは削平されているが、周溝以下は存在しているものと考えられる。

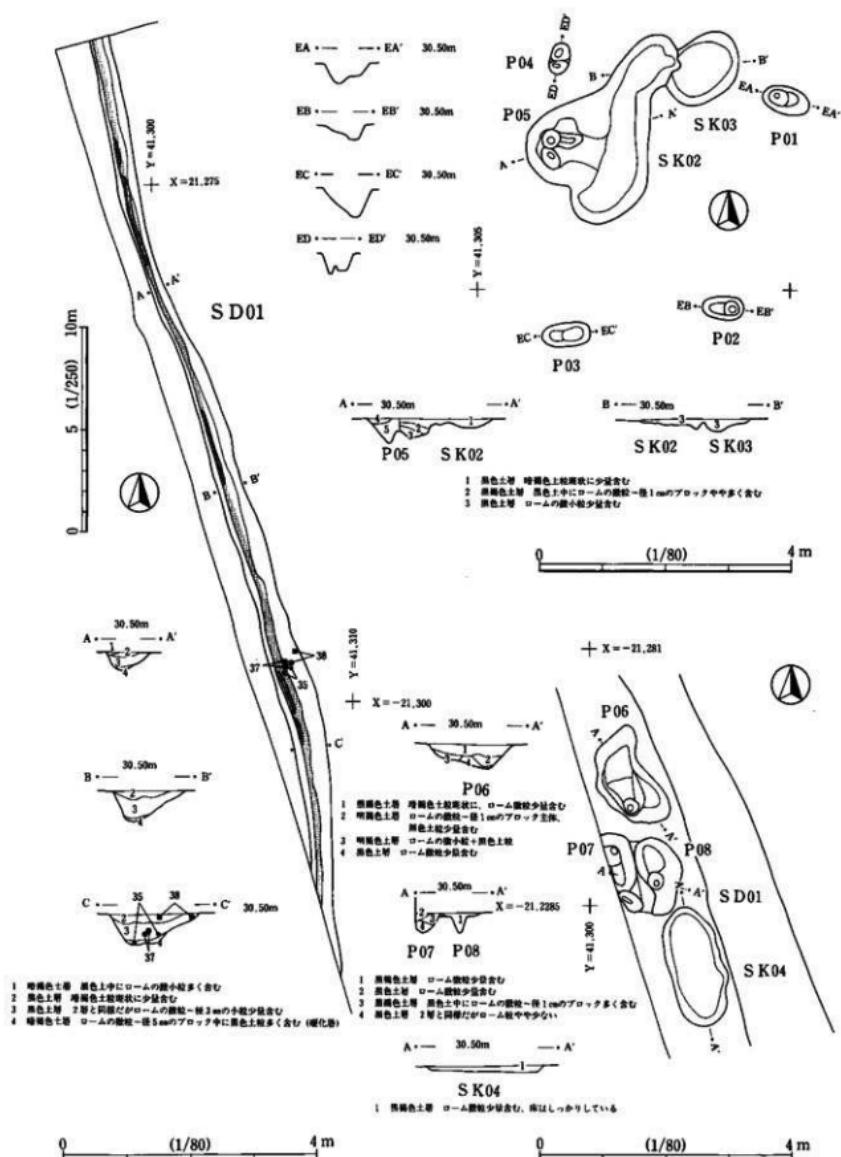
B区

S K01 (第4図、図版2)

トレンチャーよりほとんどの部分が破壊されているが、直径70cm、長径60cm・短径40cm、直径20cm・深さ10cmほどの深い穴が並んで3か所検出された。覆土は焼土を多く含み、壁はロームが被熱硬化していた。遺物の出土はなかったが、B区南部で繩文土器片が多く出土しているので、繩文時代の炉跡と推測される。

S I 01 (第4図、図版2)

B区東端部で検出された。東側の2/3ほどが調査区外である。主軸はN-20°-E、南北軸は3.4m以上、壁高は40cmを測る。壁溝をもつが、主柱穴も入出入口施設も検出されなかった。カマドは北側辺に位置するものと推定される。極めて少量の土師器、須恵器片が出土したが、小片のため図示していない。住居形状や出土遺物から、8世紀代の竪穴住居跡と考えられる。



第6図 SD01, SK02・03, P01~P08

S I 02 (第4図、図版3)

主軸はN-3°-E、規模は長軸4.5m、短軸4.3mを測る。カマドは北辺の中央よりやや東寄りに位置する。主柱穴は4本で、台形状の配置となる。深さは50cm前後である。南側に南北方向に長い深さ20cmの浅い穴があり、底が南側に傾斜していることから、住居の南辺側に木製の階段状施設が存在したことが推測される。壁溝は北西と南西隅で一部途切れる。カマドは上部が崩壊している。袖部に砂質粘土を使用している。カマドの基礎（掘方）は、全体に浅く掘り下げたものである。北西壁に掛かって長径60cmほどのビット、右側袖下に深さ30cmの細い穴が確認されたが、性格は不明である。床面には顕著な硬化面は認められなかった。遺物はカマド周辺部から多量に出土した。それらから8世紀初頭の竪穴住居跡と考えられる。

S I 03 (第5図、図版4)

主軸はN-88°-W、規模は長軸3.2m、短軸3.1mを測る。カマドは東辺の北寄りに位置する。主柱穴は深さ10cmほどの浅いビットが西側に2か所検出された。南側には浅いビットが1か所あり、床の硬化面がそこからカマド手前まで存在することから、このビットは出入り口施設と考えられる。壁溝は全周する。カマドは袖部分が砂質粘土で造られ、天井部が崩壊している。基礎（掘方）は床部分に浅い窪みが掘られている。遺物はカマド付近から多く出土した。時期は、住居の形状や遺物から8世紀初頭と考えられる。

S D 01 (第6・7図、図版5)

B区西側で検出された幅0.6m～1.9m、深さ0.3m～0.4mの溝である。主軸はN-17°-Wで、現道路には平行する。覆土は竪穴住居跡の中上層と同様の黒色土が堆積し、底部には5cm～10cmの幅で硬化層が認められた。この硬化面の存在から、この溝は道路としても機能したことが推測される。遺物は縄文土器のほか、下層から8世紀初頭の土師器、須恵器が出土した。なお、常滑大甕の破片は確認面で出土したものである。覆土や遺物から、竪穴住居跡と同時期に存在した可能性も考えられる。

P 01～P 04 (第6図、図版5)

B区北西部にはビットや土坑が集中する地区が存在する。P 01～P 04は上端の長径70cmほど、短径40cmほどで、片側に直径20cmほどの中段、直径10cmほどの下端を有する。深さは30cm～40cmである。覆土は黒褐色土である。本来の柱穴は中段以下で、上端の長楕円形は柱を引き抜いた際の掘込みと考えられる。

P 05～P 08 (第6図、図版5)

S D 01の西側のビット群である。これらの上端は長軸1.4mと大きく、当初はその大きさから土坑と推測していたが、下部でP 01～P 05同様のビットが検出されたために、柱引抜きの際に伴って上部が掘られたものと判断した。P 01～P 08は建物の柱としては明確には並ばない。その形状や不規則性は、中世の集落跡や城館跡で通常検出されるビット群と同様である。また、P 08覆土上層から常滑こね鉢片が出土した(第9図、図版6)ことから、中世遺構と考えられる。

S K 02～S K 04 (第6図、図版5)

いずれも深さ5cm～10cmの浅い穴であり、土坑墓でもなく、その性格は不明である。しかし、中世と考えられる柱穴群と近接しており、これらとの関係があったものと推測される。



第7図 S D 01遺物出土状況

III 出土遺物

本遺跡出土遺物の破片数は次のとおりである。奈良時代以降は遺構別とした。

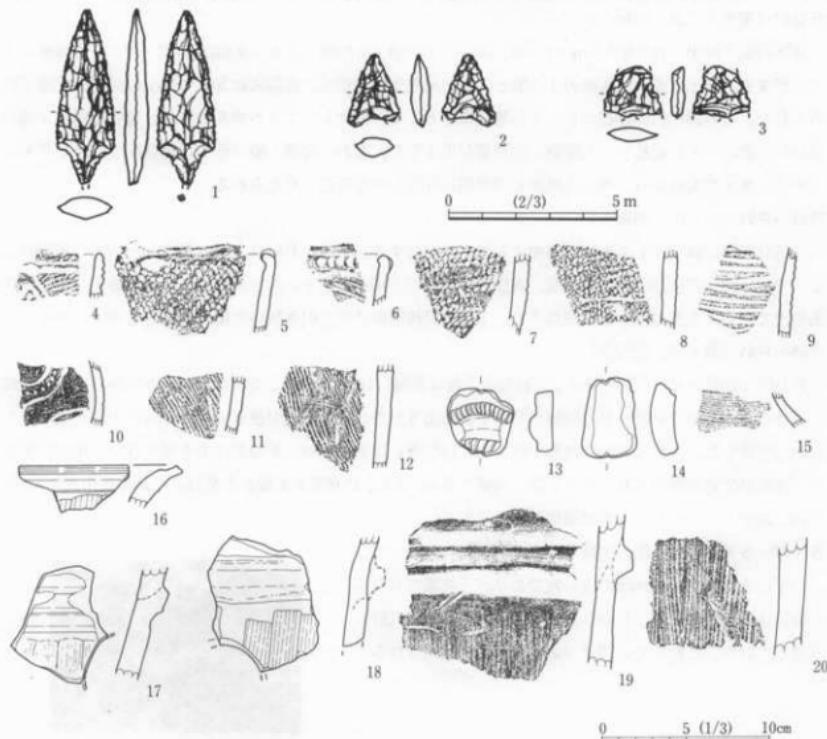
(縄文時代) チップ 3 (黒曜石 2、チャート 1)、石器 3 (有舌先頭器 1、石鐵 2) 早期土器 1、中期土器 13 (阿玉台 3、他 10)、後期土器 55 (堀之内 7、加曾利 B 16、粗製土器 6、他 26) (弥生時代) 後期土器 10 (古墳時代) 増輪 57、高坏 2 (奈良時代～中世) < S I 01 > 土師器坏 5、甕 4、須恵器坏 1、瓶 1 < S I 02 > 土師器坏 154、甕 383、須恵器坏 20、砥石 1、鉄製品 3 (鉄鐵 1、鉄片 2) < S I 03 > 土師器坏 73、甕 25、須恵器坏 15 < S D 01 > 土師器坏 132、甕 220、須恵器坏 15、カワラケ 3、常滑大瓶 1 < P 08 > 常滑こね鉢 1 < B 区一括 > 土師器坏 20、甕 56 須恵器坏 6

次に時期別に記述することとする。

1 縄文時代・弥生時代 (第 8 図、図版 6)

石器 1 は安山岩製の有舌尖頭器、2・3 は黒曜石製石鐵である。いずれも B 区一括資料である。

土器 4～10 は縄文時代後期、11・12 は晩期、13・14 は中期の土器片錐、15 は弥生後期である。

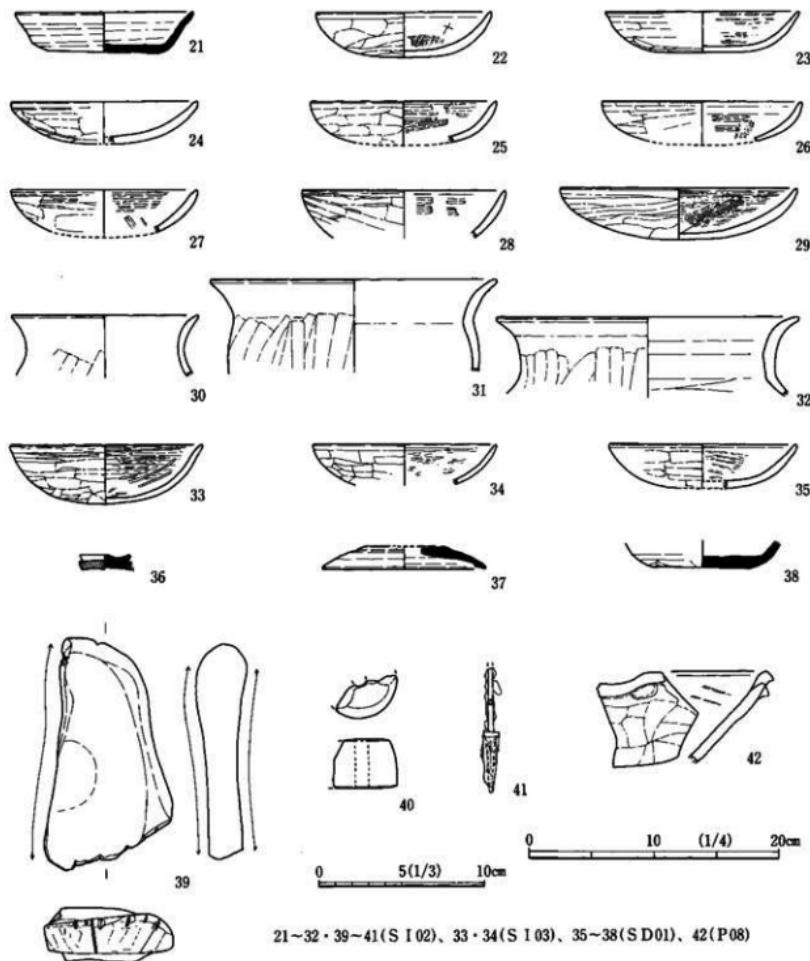


第 8 図 古墳時代以前の遺物

4は縄文が沈線によって区画される口縁部で、堀之内式に比定される。5は縄文、6は半截竹管と条痕の口縁部、7・8は縄文、9は竹管による太沈線、10は磨きと沈線による注口土器で、これらは加曾利B式に比定される。11・12は深い撒糸文で、晚期に比定される。13は阿玉台式、14は中期土器の脚部から底部にかけての破片を再利用したものと考えられる。15は弥生時代後期の壺の肩部である。

2 古墳時代（第9図、図版6）

埴輪 16は朝顔形埴輪の口縁部、17・18は円筒埴輪の透穴が一部残る部分であるが、突帯部分は欠損している。19は突帯部分が良好に残存するものである。突帯の形状から推測される年代は6世紀前半である。



21~32・39~41(S I 02)、33~34(S I 03)、35~38(S D 01)、42(P 08)

第9図 奈良時代以降の遺物

3 奈良時代（第9図、第2表、図版6）

21~32・39~41はSK02出土、33・34はSK03出土、35~38はSD01出土である。

須恵器・土師器(21~38) 内容は第2表の奈良時代土器観察表に示す。8世紀初頭の所産と考えられる一群である。

第2表 奈良時代土器観察表

博物番号	造 構	種 別	部 種	造存	口径	底径	留 高	色 調	胎 土	外面調査	内面調査	備 考
21	S I 02	須恵器	坏	3/4	14.2	8.8	3.1	灰黄褐色	石英・長石微量 雷鳴片やや多量			
22	S I 02	土師器	坏	3/4	14.0	6.3	3.5	褐色	石英・長石・ 黑色微粒やや多量	ヘラ削り	ヘラ磨き	内面に十字の縫割
23	S I 02	土師器	坏	2/5	15.5	7.8	3.0	褐色～にぶい褐色	長石・石英粒やや多	ヘラ削り	ヘラ磨き	
24	S I 02	土師器	坏	1/4	14.9		3.4	褐色	石英・長石・黑色 微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
25	S I 02	土師器	坏	1/6	14.8			(外)にぶい褐色 ～暗色 (内)暗色	石英・長石・黑色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
26	S I 02	土師器	坏	1/10	15.9		(3.5)	(外)にぶい褐色 (内)褐色	石英・長石・黑色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
27	S I 02	土師器	坏	1/8	14.8		(3.7)	(外)褐色～にぶい 赤褐色 (内)褐色	石英・長石・黑色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
28	S I 02	土師器	坏	1/8	16.2			褐色	石英・長石・黑色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
29	S I 02	土師器	盤	1/1	18.8		4.0	浅黄褐色～明黃褐色	石英・長石少量 黑色微粒やや多量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
30	S I 02	土師器	臺	口辺	(14.6)			褐色	石英・長石・黑色 微粒普通量、 白色針状物質微量	ヘラ削り	ヘラ磨き	内面全体に十字の 縫割
				1/4					口辺部は 横ナデ			
31	S I 02	土師器	臺	口辺	(22.6)			褐色	石英・長石・ 黑色微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ削り	
				1/4					口辺部は 後横ナデ			
32	S I 02	土師器	臺	口辺	(24.0)			褐色	石英・長石・ 黑色微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ削り	
				1/2					口辺部は 横ナデ			
33	S I 03	土師器	坏	3/4	15.5		4.7	(外)にぶい褐色 (内)明褐色	石英・長石・黑色 微粒少量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
									白色針状物質少量			
34	S I 03	土師器	坏	1/10	(14.8)			褐色	石英・長石・ 黑色微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
35	SD01	土師器	坏	1/3	(14.9)		(3.5)	褐色	石英・長石・ 黑色微粒普通量	ヘラ削り	ヘラ磨き	
36	SD01	須恵器	坏蓋					黄灰色	石英・長石多量			
37	SD01	須恵器	坏蓋	1/5	13.0		6.4	黄灰色	石英・長石多量 雷鳴片多量			
38	SD01	須恵器	坏	1/3	7.6			黄灰色	石英・長石多量 粒子大	ヘラ削り	ナデ	

砾石(39) 砂岩製。長軸13.7cm、短軸7.3cm、最大厚3.1cmを測る。使用面は3面であるが、刃部を立てたまま研いだ痕跡が12か所存在する。

土製紡錘車(40) 上径3.6cm、下径4.5cm、高さ3.9cmを測る。ほぼ半分が欠損している。

鉄鎌(41) 鎌先端部と茎先端部は欠損している。茎には木質が残存している。床面で検出された。

4 中世（第9図、図版6）

常滑片口鉢(42) P08出土である。注口部分が一部残る口縁部から胴部にかけての破片である。胎土は径3mmまでの長石・石英・灰色石粒を多く含み、外面明赤褐色である。口縁部平坦面の張出しは顕著ではなく、15世紀前半の所産と考えられる。¹²⁾

注

- 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」」「中世常滑焼をおって 資料集」を時期判定の参考資料とした。

IV まとめ

绳文時代 早期・中期・後期・晩期の遺物が出土しているが、主体となるのは後期の加曾利B式である。成田安食線関連遺跡群でも後期が主体となる遺跡が多く、近接した下福田稻荷原遺跡、松崎播磨遺跡で加曾利B式が多く出土している。

弥生時代 成田安食線関連遺跡群では、弥生時代の遺構・遺物は検出されていないので注目される。

古墳時代 A区から出土した埴輪の時期は6世紀前半と考えられ、成田園芸高校の西側に展開する上福田古墳群の一部が校舎敷地内に存在したことが推測される。

秦漢時代 穫穴住居跡や溝の時期は、その出土遺物から8世紀初頭に比定される。同一台地上の東側に位置する松崎播磨遺跡で当該期の竪穴住居跡が1軒、鳥内遺跡でも1軒検出されており、関連が考えられる。また、集落と同一時期と推定される溝は、道路としても使用された痕跡があること、現道と平行することなどから、何らかの区画としての意味も考えられる。

中世 成田安食線関連遺跡群の上福田和田谷津遺跡、上福田保町遺跡、下福田稻荷原遺跡は、現在の上福田集落の北から東側縁辺部に当たる。台地整形区画が検出された鳥内遺跡は、現在の松崎の集落の東側縁辺部に当たる。これらの遺構は集落本体の跡ではなく、墓域や耕地跡と考えられる。本遺跡は松崎の集落の北側の縁辺部に該当する。こうしたことから、本遺跡の中世遺構が中世松崎集落（郷）に関係した可能性も考えられる。

写 真 図 版



(1)航空写真



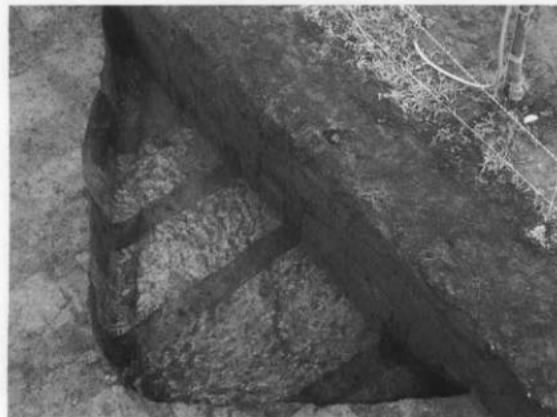
(2) B区全景



(1) A区トレンチ



(2) SK01



(3) SI01全景



(3) カマド半截状況



(4) カマド掘方



(1) 全景



(2) 遺物出土状況



(3) カマド半截状況



(4) カマド掘方



(1) S D01全景



S K02・03、P 01～P 04



(3) S D01、S K04、P 06～P 08

圖版 6

—出土遺物—



21



22



24



29



31



32



33



37



38



9



16



18



19



20



36

39

40

41

42

報告書抄録

ふりがな	なりたしまんざきとうばらいせき							
書名	成田市松崎遠原遺跡							
副書名	千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第 282 集							
編著者名	井上哲朗							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2				TEL 043-422-8811			
発行年月日	西暦 1996年1月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 町村	北緯 遺跡番号	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
まんざきとうばら 松崎遠原	ちばけんなりたし 千葉県成田市 まんざきあがとうばら 松崎字遠原	12211	060	35度 48分 30秒	140度 17分 20秒	19950601～ 19950630	1,044	建物建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松崎遠原	集落	縄文 古墳 奈良 中世	炉跡 豎穴住居跡・溝 土坑・ピット	土器・石器 土師器・埴輪 土師器・須恵器・土鍬 鉄鎌・砥石 常滑	加曾利B式主体。 6世紀前半に推定される。 8世紀初頭に推定される。 15世紀前半に推定される。			

千葉県文化財センター調査報告 第282集
成田市松崎遠原遺跡
千葉県立成田園芸高等学校情報科学科棟埋蔵文化財調査報告書

平成8年1月31日発行

編 集 財團法人 千葉県文化財センター
発 行 千葉県教育委員会
千葉市中央区中央4-13-28
財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2
印 刷 株式会社 エリート印刷
千葉市中央区市場町6-8
